

趣旨と概要

谷口晋吉・粟屋利江

「近代」を一義的に定義することはきわめて困難である。近代の指標として、たとえば、合理化と世俗化、共同体から個人へ、市場制資本主義（産業化）などが示されてきた。そうした背景から、「近代」像は、論者の立論の指標によって左右され、さらには、その指標自体、論者の認識や価値観から自由ではないし、論者が生きる歴史の大状況からも多かれ少なかれ規定をうける。

「植民地近代性 (colonial modernity)」という表現が使われ始めてから久しいが、その議論がしばしば混乱を生むのも、それぞれの論者が「近代」をどのようにとらえているかを明確化することなく、既知のこととして論を進めることが一つの理由であると思われる。ただし、「植民地近代性」をめぐる議論は、鹿野政直の表現を借りれば「めざされた近代から、問われる近代へ」（2007年、『鹿野政直思想史論集』第1巻、岩波書店、vii頁）という、1970年代、80年代以降にみられる、「近代」なるものに対する評価の大きな変化と無関係ではないであろう。

南アジアにおいては、実に多様な社会諸集団が共存-競合-敵対し、共生-支配-従属の様々な関係性を織りなしてきた。この結果、どの集団に焦点を合わせるかによって、南アジアの歴史の意味づけ、ひいては「近代」像は大きく異なる。また、南アジア世界は、脇村報告・大石報告が明らかにするように、「開放体系の」世界であり、交易を通じて歴史的に形成・再編を繰り返すグローバルなネットワークを有してきており、どの側面をもって「近代」への移行とするのかも問われることになる。

南アジア歴史研究では、イギリス植民地支配期以降を「近代」ととらえる時代区分が長らく定着してきている。しかし、経済的な指標であれ、価値観を中心にすえた指標であれ、イギリス植民地支配の開始（水島・

脇村報告が指摘するように、長期にわたるイギリス支配期のなかで、支配の理念・構造も変化した)をもって一挙に南アジア社会が新たな時代に移行したとみること(いわゆる「ウェスタン・インパクト論」)に対しては、すでに多くの疑義が表明され、外在的なインパクトから相対的に自律した内在的な変数に留意する研究も蓄積されつつある。また、井坂報告が指摘するように、西洋の諸思想・概念は現地人(エリート)たちによって、取捨選択して受容・加工された一方で、西洋のインド認識の形成は、外在的に構築され押し付けられたのではなく、現地人(エリート)たちとの共同の作業としてすすみ、かつ、後者たちは独自に地域／コミュニティ・アイデンティティを構築していった。

たしかに、「近代」南アジアにおける社会諸集団のアイデンティティ形成と諸集団間の相互関係、および、新たな経済構造がイギリス植民地支配と密接な関わりを持ったという事実は無視できない。こうした状況を鑑みるならば、「植民地近代性」という分析概念とは、西洋モデルの「近代」が植民地支配のもとでどのように変容を強いられ、「真の発展」を阻害されたかを強調するのではなく(これは、「ウェスタン・インパクト論」の別ヴァージョンにすぎない)、植民地支配体制のもとで醸成される「近代」そのものの有りようを明らかにし、ひいては西洋モデルの「近代」が隠蔽してきた植民地性を批判する視座を提供するものではないかと考える。

第4回シンポジウムは、以下のような4つのサブ・テーマと報告者、コメンテーターで構成された。

①植民地国家における統治・経済構造の形成と展開

水島司 植民地国家における経済構造の形成と展開

脇村耕平 19世紀後半のインド経済とグローバル化—農業発展／工業化／飢饉・疫病

②植民地的近代とは何か?—オリエンタリズム・ナショナリズム—

井坂理穂 植民地期インドにおける歴史認識

③南アジアにおけるアイデンティティの複合性と動態

内藤雅雄 植民地下インドにおけるダリト・アイデンティティの模索—マハーラーシュトラの場合—

大石高志 ムスリムにおけるアイデンティティとその物象化

④文学に見る近代の自画像と歴史認識

白田雅之 文学に見る近代の自画像と歴史認識

・コメンテーター

神田さよこ、近藤光博

以上のようなサブ・テーマ設定と報告者・コメンテーターの配置がめざしたのは、「近代」の定義から入るというよりも、長い時間的スパンのなかで、植民地支配は経済的もしくは統治形態としていかに特色づけられるのか、植民地支配下での変容を人びとはどう生き、概念化したのか、どのように時代を感じ表現したのかを考えるうえでの手がかりを提供することであり、かつ、社会経済構造の動態を、人びとの知的・文化的な営為と接合することであった。これらの報告から浮かび上がってくるインド近代像とは、実に多種多様なアクターが、狭義の南アジアの領域を超えて複雑に交差する、すぐれて動態的な像である。

以下、各報告・コメントの概要を記す。

水島報告は、18世紀後半に始まるイギリス東インド会社によるインド支配の性格を、「会社化」と概念化し、東インド会社による地稅徴収（とくに南インドに導入されたライヤットワーリー制度）と商取引の特徴と、それらがもたらしたインド社会の変容を分析する。また、一商社がやがて植民地国家権力へと変貌する過程で、現地インド人エリートがおおいに参画したことに注意を喚起する。

脇村報告は、19世紀後半を主に対象とし、グローバルな視角から農業・工業の領域における一定の発展を指摘することで、富の流出による貧困化といった民族主義的な定式を批判する。さらに、「経済成長期」が「飢饉と疫病の時代」であった事実を、「開発」およびイギリスの「レッセ・フェール」政策との関係から解く。この報告はすでに、『『長期の19世紀』—インド経済史を中心に—』として、籠谷直人・脇村耕平編『帝國とアジア・ネットワーク—長期の19世紀—』（世界思想社、2009年）として刊行された。本特集に収められた論考では、インド亜大陸は大航海時代に先だつ時代から「開放体系」の世界として陸上・海上の交易ルートを通じて外部世界と密接に結びついていたことが指摘される。さらに、インド系商人や企業家たちの、数世紀にわたる旺盛な活動を描く。

脇村によれば、インドが「閉鎖体系」へと移行するのは20世紀になってからであり、例外的ともいえる時代だった。

井坂報告は、19世紀後半、インド知識人たちが様々な「自分たち」の歴史を記述し始め、そうした営為を通じてアイデンティティを模索した様相を、パールシー知識人カーラカーの作品を事例として論ずる。

大石報告は、ムスリムたちのアイデンティティ形成に関する研究をサーヴェイするとともに、東南アジアや日本に広域ネットワークを擁したムスリム商人を取り上げ、彼等のアイデンティティの動態を、商品ラベルにおけるモチーフの選択・操縦という外在的な物象のなかで、捉えようと試みる。

白田報告は、近代ナショナリズム形成期(1858-1918)と民族運動とガンディー時代の時代(1919-1947)における主にベンガル文学作品、ならびにポストコロニアル期を代表させてナイポールの作品を、近代という時代にさまざまなスタンスから対峙した知識人の営為として読み解く。

神田のコメントは主に水島、脇村報告に向けられたもので、イギリス支配によってもたらされた新たな経済社会構造を理解するためには、「法の支配」といった国家からの介入を考慮する必要があるという指摘がなされた。一方、近藤によるコメントは、「近代(性)」の特徴を、「世俗化(非宗教性)」にあるとしたうえで、南アジアの近代性にいかなる固有性が認められるかを問うた。

全体討論では、イギリス支配の開始を前後とする「継続性」と「断絶性」をめぐる理解、「近代性」を考える際に、「共同性の喪失」という側面が重要ではないかなどといった論点がだされた。

付記・内藤雅雄氏による報告は、諸般の事情により収録することができなかった。同報告は、アンバードカルとガンディーによるタリ解放運動の間を揺れうごいたP・N・ラージボーシ(1906-84)の生涯に焦点を当て、タリトのアイデンティティ形成の多様さと困難を論じる貴重な報告であった。

たにぐち しんきち ●一橋大学経済学研究科 (tani@econ.hit-u.ac.jp)

あわや としえ ●東京外国語大学大学院総合国際学研究院 (tawaya@tufs.ac.jp)